幼児における他者のネガティブ感情への対処と自己制御機能との関連

小嶋佳子

(愛知教育大学教育学部)

キーワード: 嫌悪, 怒り, 自己制御機能

Relationship between coping strategies for other's negative emotions and self-regulation in young children.

Yoshiko KOJIMA

Aichi University of Education

Key words: disgust, anger, self-regulation

本研究は、自分の行為によって他者に嫌悪や怒りを感じさせた場合の対処方略と、自己制御機能との関連を、幼児を対象に検討した。

方法

参加者 年中男児18名(58—70か月, 平均63.4か月), 年中女児19名(56—70か月, 平均63.8か月), 年長男児21名(71—82か月, 平均75.9か月), 年長女児18名(71—81か月, 平均77.5か月), および、実験に参加した幼児の担当教諭6名。

手続き 対処方略を調べるため、2人の幼児(A, B)の相互作用を示した物語を4つ作成した。物語は絵と朗読を録画したVTRを用いて呈示した。物語の半数ではAの行為によってBは嫌悪を感じ(嫌悪物語), 残りの半数では怒りを感じた(怒り物語)(内容は表1参照)。各参加者は4つの物語をすべて見た。実験は個別で行った。物語ごとに最後の絵でVTRを静止し、参加者がAだったら次にどうするかを尋ねた。自発的な回答がない場合は、各物語に対応した向社会的, 反社会的, 非社会的対処を絵と口頭での説明によって示し、選択させた。向社会的対処とは、相手の感情に共感し、相手と自分の両方の感情を考慮した行動(例:一緒に作ろうと言う), 反社会的対処とは、自分の不満感への対処を優先し、相手に対してとる攻撃的な行動(例:邪魔だからあっちへ行ってしまう), 非社会的対処とは、不愉快な状況から逃れようとし、相手を無視したり、問題となる状況から回避するような行動のことである(例: Bのことを気にせずに1人で遊ぶ)。

自己制御機能を測定するため、柏木(1988)の「教師による幼児の行動評定尺度」の項目から自己主張10項目, 自己抑制15項目を選択した。これらの項目について、実験に参加した幼児の担当教諭に5段階で評定を求めた。

結果と考察

対処方略 自発的な回答を向社会的, 反社会的, 非社会的対処に分類した。次に、嫌悪物語と怒り物語別に各対処方略の回答数を求めた(最大値=2)。表2上段に示したように、

表1 各物語の内容

積み木: Bは積み木で遊んでいました。AがやってきてBの使っていた積み木を取っていきました。
基地: Aは基地を作っていました。Bも基地を作りたいので“入れて”と言いました。Aは“Bは入っちゃダメ”と言いました。
注) “積み木”と“基地”のいずれでも、嫌悪物語の場合は“Bはすごく嫌だなと思いました”という朗読を、怒り物語の場合は“Bはすごく怒りました”という朗読を最後に加えた。

表2 各対処方略の平均回答数(SD), および、
対処方略と自己制御機能との相関係数(偏相関係数)

	嫌悪物語		怒り物語	
	向社会的	反社会的	向社会的	反社会的
対処方略の平均(SD)				
年:男児	1.72 (.45)	0.22 (.42)	0.06 (.23)	1.83 (.50)
中:女児	1.89 (.31)	0.00 (.00)	0.11 (.31)	1.74 (.44)
年:男児	1.90 (.29)	0.00 (.00)	0.10 (.29)	1.90 (.29)
長:女児	1.89 (.31)	0.00 (.00)	0.11 (.31)	1.78 (.42)
相関係数(偏相関係数)(N=75)				
自己主張	.15 (.12)	-.15 (.15)	-.07 (.03)	.23* (.25*)
自己抑制	.15 (.11)	-.11 (.08)	-.10 (.07)	.01 (.05)

* $p < .05$, + $p < .10$.

反社会的対処や非社会的対処の回答数が非常に少なかった。向社会的対処の回答数に基づいて年齢(2)×性(2)×物語の種類(2)の3要因分散分析を行ったところ、性×物語の種類の交互作用が有意で($F(1, 72) = 4.07, p < .05$), 女児において嫌悪物語と怒り物語との差が有意であった。

対処と自己制御機能の関連 自己制御機能の評定に基づき因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行った。その際、欠損値のあった1名のデータを除いた。分析の結果、自己主張、自己抑制と解釈される2因子が見出された。以下の分析には因子負荷量が.35以上で一方の因子のみに高く負荷している項目を用いた(表3参照)。次に、因子別に評定値を平均し、自己主張得点、自己抑制得点とした(得点の範囲は1—5, 数値が高いほど各側面が高いことを示す)。そして、自己主張、自己抑制の各得点と各対処方略との相関係数を求めた。年齢と自己抑制を制御変数とした場合の、各対処方略と自己主張との偏相関係数、および、年齢と自己主張を制御変数とする各対処方略と自己抑制との偏相関係数も求めた。表2下段に相関係数の値を示した。怒り物語での向社会的対処, 反社会的対処と自己主張との間に有意な相関係数がみられた。

以上の結果より、5歳児でも他者にネガティブな感情を抱かせた場合は、その人物の感情を改善するように対処すべきであると考えていると言えよう。女児では、この傾向が、嫌悪を感じさせた場合により強まることが示唆される。また、自己主張が高いと、他者に怒りを感じさせた場合に、その感情を改善するような対処方略の想起が促進され、他者に対する攻撃的な対処方略は抑制されると考えられる。

引用文献

柏木恵子(1988). 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
※本研究のデータの一部は、日本心理学会第66, 67回大会で発表した。

表3 自己制御機能に関する質問項目と因子負荷量

自己主張($\alpha = .88, M = 3.55, SD = 0.71$)		I	II
入りたい遊びに自分から“入れて”と言える		.13	.87
自分のやりたい遊びを友だちを誘って始められる		.01	.82
他の子に自分の考えやアイデアを話す		.12	.79
考えをきいたり、感想を求めると、自分なりの考えや感想を出す(持っている)		.11	.78
他の子どもと自分の意見が違っているときでも主張できる		-.19	.75
遊びたいおもちゃを友だちが使っているとき、“貸して”と言える		.31	.66
ちよつと失敗したりうまくいかない、すぐあきらめてしまう		-.18	-.36
自己抑制($\alpha = .91, M = 3.35, SD = 0.66$)		I	II
他児の物が欲しくても我慢する		.83	.13
“してはいけない”と言われたことはしない		.77	.15
遊びのルールが守れる(ズルをしたり、ごまかしたりしない)		.73	.26
叩かれても、すぐ叩き返さない		.73	.15
悲しいこと、悔しいこと、つらいことなどの感情をすぐ爆発させずに抑えられる		.72	.21
友だちの物や他の子が使っているおもちゃが欲しいと、すぐ取る(ブランコやすべり台、おもちゃの貸し借りなど)遊びの中で自分の順番を待てる		-.68	-.09
人の目を引こうと目立ったことやかわったことをしてみる		-.65	.17
ひどい悪口を言われたりからかわれると、怒る		-.63	.16
仲間と考えの違うとき、相手の考えを入れられる(自分の考えだけを押し通そうとしない)		.62	.08
勝ち負けのあるゲームで負けると泣いたり、怒ったりする		-.59	-.12
ケガしたり、血が出て我慢できる、泣かない		.36	.30
		寄与率(%)	
		29.7	